

脈出現頻度で差を認め、有用な分類であると考えられた。これにより、手術における血行郭清の範囲などにより合理性をもたらすものと考えられた。

20) 腹部 CT で診断し得た腸回転異常症の 2 例

清野 泰之 (長岡赤十字病院 放射線科)
 桑原 悟郎・伊藤 猛 (新潟大学放射線科)
 酒井 邦夫

脾鉤部レベルの横断面では、通常上腸間膜動脈 (SMA) の右側を上腸間膜静脈 (SMV) が走行する。しかし、腸回転異常症 (malrotation) ではこれら通常の関係が消失し、SMA の左側を SMV が走行する。これは SMV rotation サインとして知られている。今回我々は、その横断像から malrotation を疑い、診断し得た 2 例を経験した。

何れも Grob の nonrotation タイプと考えられたが、これは中腸 (midgut) の SMA を軸とした反時計方向の回転が 90° (正常は 270°) にとどまったことによる。SMV-SMA の位置関係は、中腸の回転の程度によるものであることが推測された。

21) 意識消失発作を契機に発見された下大静脈内腫瘍 (intravenous leiomyomaosis) の 1 例

渡辺 雅史・銅冶 康之
 早川 晃史・森 茂紀
 本山 展隆・宮崎 裕
 横田 剛・市田 隆文
 朝倉 均 (新潟大学第三内科)

今回我々は、子宮静脈叢より発生し右内腸骨静脈、下大静脈を経て右心室まで成長進展した intravenous leiomyomaosis を経験したので報告する。

症例は 54 歳の女性で、44 歳の時に子宮筋腫切除術を受けている。繰り返す失神発作を主訴に来院し、超音波・CT・血管造影にて、右内腸骨静脈から下大静脈を経て右室に達する静脈内腫瘍と診断された。特に内腸骨動脈造影で、腫瘍内を貫く複数の拡張した血管が下大静脈内を上行し、心臓に達するのが明瞭に描出され、特徴的な所見と思われた。病理組織診断は平滑筋腫で悪性像はなく、本症と診断された。

22) 超音波照準による対外衝撃波碎石療法

広瀬 慎一・古川 浩一 (長岡赤十字病院 内科)
 小池 雅彦・遠藤 次彦
 佐藤 功・和田 寛治 (同 外科)

1990 年 8 月より 13 例の胆石患者に、体外衝撃波療法をおこなった。Siemens 社製 Lithostar OTM にて超音波照準下 3,000 から 10,000 回の衝撃を加えた。

8 例に著効をみ、うち 2 例は結石の完全消失がみられた。

衝撃波が皮膚を穿通する際、痛みを訴え、中止せざるを得ない例もみられた。また、施術の翌日開腹した例では胆嚢表面に軽度の出血が見られた。その他の副作用はなかった。

今回は、適応を選ばずおこなったため効果の見られない例も多かったが、適応を選んで行なえば有用な治療法であると考えられる。

23) 胆嚢周囲膿瘍と鑑別が困難であった胆嚢癌の 1 症例

中島 昌人・伊藤 信市
 額賀 春彦・宮元 歩
 七條 公利・植木 淳一
 小島 豊雄・片桐 次郎
 大貫 啓三 (立川総合病院内科)
 植木 秀任 (同 外科)

症例は 68 歳女性、右上腹部痛精査を目的に入院となった。現症では右上腹部に腫瘤を触知し、腹部エコー (US) では hypo-echoic な腫瘤像が胆嚢体部から底部を取り囲んでいた。腹部 CT でも US と同様の所見がみられた。画像所見と臨床症状から胆嚢炎による胆嚢周囲膿瘍を疑い、抗生剤による治療を行ったが、2 週間後の腹部 CT では腫瘤像の増大がみられた。また、内視鏡検査にて十二指腸下行脚に潰瘍性病変を認め、生検の結果は低分化型腺癌であった。本症例は胆嚢原発の低分化型腺癌が壁外性に発育して腫瘤を形成し、さらに十二指腸下行脚に浸潤したものであり、胆嚢周囲膿瘍との鑑別が困難であった。